

# 序

豊川  
斎赫

「丹下さんのキャリアは長いですが、最も優れた仕事を残されたのは、一九四六年に東京大学建築科に丹下研究室を構えてから七〇年代までと僕は考えています。当時の作品はすべて素晴らしい。(中略)」

僕が在籍した五〇年代初期、アトリエとしても丹下研究室は一つの「特徴」を持っていました。喻えるなら、プロ野球ではなく高校野球のようなチーム(笑)。普通の建築事務所はいろいろな大学の卒業生が集まってくるのですが、当時丹下研究室は全員が東大の卒業生で、助手や研究員、大学院生が中核を成していた。特に彼らの頃は旧制高校の世代で同じ学校の先輩・後輩には厳しくも濃密な関係がありましたから、レスペクトの念や同胞的なスピリットが、新しいことに挑戦する難しい作業等では活きていた気がします。(中略)

一連の仕事によって日本の近代建築の門戸を世界に対して開放したことが、丹下さんが戦後日本の建築界に果たした最大の功績ではないかと思えます。」

榎文彦「丹下健三」《文藝春秋》新年特別号 2013.01 pp.324-325

「五〇〜六〇年代の日本では(建築・都市・国家を)まとめて全て考えていたけれど、これは近代の枠組みに過ぎなかったもので、一九七〇年代以降、ほくは「建築は建築、都市は都市。全て切り離して、別問題として組み立てるべきだ」と主張してきました。おそらく四半世紀ぐらいは有効だったと考えています。

しかし、インターネットの時代になったら、切り離してバラバラになっていたものがまた結合し始めたのです。更に建築の中にはコンピュータの領域まで出てきた。(中略)

建築はどんなに新しいものを作っても、評判として五年も保たない。五年以上保つ建築をつくれれば、建築家として生き残っていけるかもしれません。コンセプトは三〇年近く保つかもしれないけれど、それ以上は保たない。コルビュジェが残したコンセプトも、現代では古臭い理論になってしまっている。

だからこそ、コンピュータから国家まで全体をまとめることは難しい。到底不可能だと思う一方で、枠組みのパスペクティブだけは、少し読めるようになってきました。これは年の功かもしれません。」(括弧内筆者)

磯崎新《GA》No.119 2012.11-12 p.123

丹下健三がこの世に生を受け百年となる2013年の新春、丹下健三の愛弟子の一人である建築家・榎文彦は師の足跡を振り返る文を雑誌《文藝春秋》に寄せた。この文中に挙げられた丹下の業績は、以下三点に要約できる。

第一に、丹下は「広島平和記念公園」から「国立屋内総合競技場」、そして大阪万博「お祭り広場」にいたる70年代まで数々の傑作を生み出し、第二に、高校野球的な雰囲気「丹下研究室」において後続を育成し、第三に、70年代以後に「日本の近代建築の門戸を世界に対して開放したこと」である。

第一の業績は、「丹下健三」という固有名を日本全国の津々浦々に知らしめた主要因であり、第三の業績は海外で夥しい数のプロジェクトを受注して「KENZO TANGE」のブランドを確立したことに関連する。さらに拙著『群像としての丹下研究室』(オーム社2012)をこの三つの業績から位置づけようとするならば、拙著は第二の業績に注目しながら、第一の業績のメカニズム(「建築・都市・国土」を有機的に連関させる構想力のあり方)を解き明かそうとしている。

ところで、この70年代以前に形成された「丹下健三」と、それ以後に形成された「KENZO TANGE」という二つのイメージ(メディア上の偶像、もしくはブランド)の間には埋めがたい溝が存在している。その証拠として、筆者は建築家・レム・コールハースや日本の高名な建築史家から、「丹下健三」と「KENZO TANGE」という二つのイメージの分裂の理由について同様の質問を受けたことを強く記憶している。

いまにして思えば、「丹下健三」のイメージは戦後の焼け野原の中で、絶望することなく構想力を発揮し、新しい都市と建築のヴィジョンを提示し続けた新進気鋭の建築家に端を

発するものと考えられる。また「KENZO TANGE」のイメージは石油価格の高騰と産油国の好景気に支えられ、中東やアフリカの王族たちにこよなく愛された宮殿デザイナーのイメージであり、この文脈で鈴木俊一東京都知事と丹下の蜜月も語られることになる。

しかし、こうした丹下にまつわる対極的なイメージは結局のところイメージに過ぎず、かつての雑誌面や新聞紙面上に踊った毀誉褒貶を再語りしているに過ぎない。また別の角度から捉えれば、楨の指摘する通り、丹下が「長いキャリア」を持ったがゆえに、丹下が携わった全プロジェクトを一望しえた者がいまだ存在せず、丹下健三の中で何が一貫し、何がどのように変わったのか、評価軸を設定しづらいことも丹下にまつわるイメージの分裂に拍車をかけている。

ここで視点を切り替えて、丹下のもう一人の愛弟子である磯崎の指摘を咀嚼すれば、50・60年代に磯崎は丹下のもとで、丹下とともに「建築・都市・国家」を複合体(メガストラクチュア)として構想した。その後、磯崎は「お祭り広場」の設計を経て、丹下とは対照的な論陣を張り、「建築・都市・国家」を解体するさまざまな方法を追求した。この時期、建築を志す者は皆、磯崎に倣って丹下を批判したが、このことは一角の建築家になるための通過儀礼だったのかもしれない。しかし、20世紀末にコンピュータ全盛の時代に突入し、建築そのものも、建築や都市に関するコンセプトもほどなく消耗されるようになった。同時に、丹下を批判して事足りていた大半の建築家諸氏も、自らが無思想な動物に過ぎないことが明らかになった。なぜならば、かつて磯崎が解体し尽くしたはずの「建築・都市・国家」がコンピュータを介して再び複合体(メガストラクチュア)として現れ出たからである。マルクス

流にいえば、「21世紀の日本に幽霊が現れる。「建築・都市・国家」という幽霊である」と。

この21世紀の危機的状況を見抜く方法について、磯崎は自らの「年の功」を挙げるが、筆者の言葉でいいかえれば、「磯崎の経験値をも含んだ、丹下を取り巻く集合知こそ、21世紀の「建築・都市・国家」の本質を照射するのではないか」と考える。つまり、今日において丹下を読み返されるべき理由とは、現状の「建築・都市・国家」には不気味な閉塞感が覆っており、これらを解消するヒントが丹下と丹下を取り囲む人々が残した複数の足跡に刻まれている、と直観するからである。

本書は戦前期から「東京都新庁舎」にいたる80年代末まで、丹下健三と深く関わりを持った方々48(+1)名から伺った話をまとめたインタビュー集(話し言葉を介した集合知)である。いいかえれば、本書は丹下の携わった国内・国外の大半のプロジェクトについて可能な限り資料を押さえ、証言を引き出し、従来の「丹下健三」像や「KENZO TANGE」像に引きずられることなく、あるがままの丹下を描き出そうとした。

さらに、49名もの建築関係者の証言を一同に集めた書籍は管見する限り日本に存在せず、本書は丹下がめざした「建築の本義」に迫る『戦後日本建築家列伝』と位置づけられる。そもそも本家ジョルジョ・ヴァザーリの『ルネサンス芸術家列伝』は芸術家の言い伝えの寄せ集めであった。この点でヴァザーリの作業は思い込みや類推、聞き間違いの危険性を孕んでおり、厳正さと学術性を旨とする今日の日本建築学会論文審査の対象外にある。しかし「ルネサンス芸術」というカテゴリーが世界中で認識され、人類の至宝としてみなされているのは、ミケランジェロの傑作は当然のこととして、ヴァザーリの偉業なくしてありえなかつ

た。翻って、後世の建築家や建築史家が「丹下を中心とする20世紀の日本建築はルネサンス建築に比する業績であった」と感じた瞬間に、本書はその根源を辿る絶好の資料となるであらう。

一方で、本書はヴァザーリの記述スタイルと異なり、インタビュー形式を採用したため、多声楽的 polyphonic な傾向が否めない。つまり、49名の発話者がいれば49通りの丹下像が存在するため、聞きよう(読みよう)によっては各々の証言の間に矛盾が存在し、不協和音的な場面もあれば、面識のないはずの二人の発言が図らずも符号する偶発的な調和も存在する。

20世紀という時代が後世に何を残したのか。殊に20世紀を生きた日本の建築家たちは何を思い、何を信じて建築に取り組んだのか。

『丹下健三とKENZO TANGE』に収録された49名の証言と資料を通じて、読者がその片鱗を感じ取れば、本書も十分に役割を果たした、といえよう。